

令和6年度 学校評価表

学校教育目標		関わりの力をもち、自分を表現することができる児童の育成 ～人は人の中で人になる～			
a ミッション	主体性と規範意識を身に付け、心を育てる小中連携教育の推進	a ビジョン		自ら学ぶ意欲を培い、基礎・基本の学力を確実に習得させる学校 自己コントロールができ、協働的な学びの場の中で自己肯定感を育む学校 自らの健康に関する課題を明らかにし、自律的に解決できる児童を育む学校 地域・保護者と共に教育活動を創造する学校	

尾道市立栗原北小学校

評価計画						自己評価				学校関係者評価				改善計画	
領域	b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	7月達成値	1月達成値	h 達成度	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価			l コメント	m 改善案
											イ	ロ	ハ		
児童の育成に関わること	学知識をの育理解するの質を高め、確かな	「自ら学ぶ意欲」を培う教育環境を構築する。 基礎・基本の学力を確実に習得させ、論理的思考力、表現力を培う。	・「栗原北小」学びのスタンダードの定着を図る。 ・フレームリーディングによる「読む活動」の充実を図る。 ・読解力を支えるベースとして読書活動、NIE活動を活性化させる。 ・算数科において、2年・4年・5年・6年は習熟度別学習を展開し、基礎学力の定着を図る。 ・個別最適な学びを取り入れた授業を実践する。	「自律的学習動機尺度」の比較により、内発的動機づけが有意に向上する。 標準学力調査（国語科・算数科）において、全国平均より向上する学級数（通常学級） 国語科、算数科の学期末テストにおける学級平均が期待値との比較において3ポイント向上する学級数（通常学級）	肯定 65% (6月12月比向上)	肯定 78%	国語科 4/6学年 算数科 4/6学年 (1～6年)	国語科 100% 算数科 75%	94%	・「自律的学習尺度」を測るアンケートにおいて、6月が78%、12月が74%で肯定評価が高い。しかし、6月より12月は4%下がっている。項目で見ると、6月に引き続き「自分の夢を実現したいから」「自分のためになるから」と勉強することに価値を見出し学習意欲をもちながら勉強する項目に成果が見られる。 ・国語科では、物語文・説明文の読みの視点を積み重ねることに重点を置いて研究を行った。このような結果、高学年になると読みの視点を一人一人が選択し学びに向かう姿が見られた。標準学力調査において、全国平均より向上する学級数が4/6学年であった。 ・算数科では、習熟度別学習によって一人一人に合った授業を展開すること、基礎的・基本的な知識及び技能が定着しつつある。標準学力調査において、全国平均より向上する学級数は3/6学年であった。	3	0	0	一人一人の学力が急激にあがらなくても、集団で学ぶ場面に自分の居場所があり、関わりあって学ぶ場面があれば、学びに向かう姿勢が身につき、その上で、個別への配慮もされていて、今後も継続した指導を望みます。 自分から進んで学習できる環境を児童たちで考えたいと思います。 一人一人が何の為に勉強しないといけないのかを理解できるとともに主体的な学びが進められると思います。	引き続き、 ①外部講師を招きながら、定期的に研修を行い、教材の価値により深く迫るための教材研究の力を高める。 ②「関わり合いの授業づくり」を教員・児童が一体となって継続していく。 ③書く時間を確保し、自分の考えを一人一人整理して書きさせる。また、説明文の読み視点にも書きを置く。 ④筋道を立てて発表させたり、図と式だけでなく説明をノートに書かせる。
	豊かな心や健康やかな体を育成すること	自律的な行動、他者意識をもった言動ができる児童を育てる。 協同的な学校生活の場を意図的に設定し、自己肯定感、役立ち感、憧れ感、リーダーシップ、フォローシップを醸成する。	・隔週で「コミュニケーションタイム」を設け、他者理解の育成を図る。 ・クラス会議を定期的に開催し、自治的風土・共同体感覚を構築する。 ・ファミリー活動（掃除、遊び、行事）による異学年交流を促進する。 ・集会やファミリータイムなど、子どもたちの主体的な表現の場、チャレンジの場を設ける。 ・不安傾向を軽減させるプログラムを継続実施する（第5学年対象）。 ・思いやりの木の取組を推進する。	学校生活に関するアンケートにおいて、①ファミリーやクラスに関する項目②「学校が楽しい」の項目の肯定的評価の割合 アセスの生活満足度5.0以上の学級数	肯定的評価 ①80% ②80%	11/11学級			111% 91%	A B	3	0	0	ファミリー活動は本当に良い活動だと感じます。 異学年との関係がとても良く、みんなが楽しく活動しているのがよくわかります。 先生方が協力的に活動されているのが感じられます。	・クラス会議やファミリー活動、思いやりの木など、1、2学期の取組を引き続き継続して行う。 ・ファミリー活動を意図的に仕組み、児童のモチベーションを高めていきたい。 ・アセスの分析をもとに、個に合った指導・支援を行っていく。また、個人面談週間を設けたり、必要に応じてスクールカウンセラーと繋がりたりするなど、児童の心身に寄り添いながら支えていく。 ・どの取組も「何のため」かを明確にし、児童も教員も目的意識をもって取組んでいく。
	自らの健康に関する課題を克服するための実践を自律的にできる力を培う。		・月に2回以上、食育に関する動画や写真を使った指導等を栄養教諭と担任で協力して行う。 ・委員会活動を中心に、配膳時間の短縮の取組を行い、食事時間を確保する。また、食に関する啓発活動を行う。	給食に関するアンケートにおいて、①「好き嫌いせず食べようとしている」、②「食べ物を大切にし、残さず食べるようにしている」の割合 主菜・副菜の残食率の割合	肯定的評価① 80%（昨年度78.2%） ②90%（昨年度87%） 残食率6%以下 （前年度6.4%）	①80.9% ②97.7% 残食率4月5.4% 5月7.1% 6月5.5% 7月5.7%	①70% ②82.5% 残食率9月7.1% 10月9.1% 11月8.2%	105% 97%	A B	・給食に関するアンケートにおいて「好き嫌いせず食べようとする」「食べ物を大切に残さず食べようとする」の肯定的な評価の数値が前年度より後期下がっている。短期期間では意識が高まっているが、長期で見ると「食」に関する意識が高まっていない。 ・残食率が増えた理由としては一人一人の食べ過ぎる習慣や、食べ物の大切さがあまり実感できていない。残食率の低減は多く見られた。（嫌いな物は残す。食べ残しが多い）	3	0	0	みんなと一緒に食べることが楽しいと感じる時間になってもらいたいです。 食や食材に関心のある子になってもらいたいと思います。 「お楽しみ給食」など自分たちで選べる給食にしてみると残食率も下がるのではないのでしょうか。	・栄養教諭と担任が連携して食に関する意識を高めていく。 ・児童だけに「食」に関する意識を高めてくれるのではなく、研修等で職員も学校の給食課題を把握し、職員も意識を高める。 ・児童を中心に残食率を減らす取組を行う。 ・食べ物の大切さを時間を確保するような取組を行う。
関わる地域・保護者に	す教社育会課に程開か実現現た	地域社会の中に位置付く学校をめざし、教育活動へ積極的な協力者を増やす。	・保護者、地域に教育活動の具体的な展開について広報し、理解と協力を得る。	地域のゲストティーチャーから学ぶ授業を展開する。 学校教育活動（行事等）後の地域、保護者アンケートにおける肯定的評価の割合。	ゲストティーチャーとの授業6/6学年 肯定的評価80%以上	4/6	6/6	100% 100%	A A	・二分の一人成人式に向けて、将来の夢について考える学習の中で、地域のゲストティーチャーから仕事（介護）について話を聞いた。来年度入学する児童との関わりを深めるために、予定ことも園へ交流に行ったりして、学習を深めることができた。 ・音楽発表会実施後のアンケートでは、児童の姿や取組についての肯定的評価をいただくことができた。また、アンケートの結果をもとに来年度に向けて改善を図っていく。	3	0	0	自分たちの住む場所のことを知るのとても良いことだと思う。引き続き進めていきたい。 幼稚園・保育園との連携も引き続きお願いいたします。	・学年間で連携を図り、系統性を考えることで、ゲストティーチャーからの学びが生かされていく授業展開を計画的に進めていく。 ・今後も、行事を中心とした関わり合う児童の姿、目標に向かって学習に励み成長していく児童の姿を積極的に発信し、地域や保護者の理解と協力を得られる取組を行う。

※ ____部は昨年度からの追加・修正点

【自己評価 評価】
A：100≦（目標達成）
C：60≦（もう少し）＜80

B：80≦（ほぼ達成）＜100
D：（できていない）＜60

【外部評価】
適正でない、
イ：自己評価は適正である、ロ：自己評価は適正でない、ハ：わからない。